

Newsletter

Toyo Eiwa University Institute of Media and Communication Studies

第14号

発行日 2024年3月20日

視覚文化は何を伝えるか？

SNSに載っている写真、電車の中の広告、郵便ボックスに配布されているチラシ等々。いうまでもなく、私たちの生活は視覚的なもので溢れている。特に携帯で見ている画像が多く、見るスピードも速い。それらの視覚文化からは、無意識に様々な認識や印象を得ている。

私が秋学期に担当している「ビジュアル文化論」は、ビジュアル・リテラシーという能力を磨く授業でもある。その授業では、「写真と真実の神話」について話し、一時期に話題になっていた「Young people on the Brooklyn waterfront」という写真を学生と一緒にじっくりと見た。ニューヨークに在住しているドイツ人の報道写真家Thomas Hoepkerが2001年9月11日に撮ったこの写真には、何がどのように写っているのかを分析し、その意味について考えた。そして、写真は真実を写すとは限らないという結論に辿り着いた。のんきに見える人々は、実際はのんきではないかもしれない。

考えてみれば、その結論は当たり前のことである。自撮りをしたことがある人は、みな共有している経験だろう。自分の可愛い写真を納得いくまで撮り続けている。どの写真でも実際の自分を写していたとしても、角度などの違いによって、可愛いと可愛くない自分の差が激しいものだろう。視覚文化の制作者の立場になって初めて、その差と視覚文化が持っている可能性を強く意識する。一方、視覚文化の消費者側に立つと、そのことを何となく忘れがちなものである。

本研究所は、2023年度に春学期と秋学期に渡って「視覚文化は何を伝えるか？」という講演会を企画した。外部の研究者に、彫刻・絵画・地図・風刺画・イラストというそれぞれのメディアについて話を伺った。それらの視覚文化を通して、過去を見た時に何が見えるのか、どのような注意点があるのかを教わった。そして、色や形などを通して私たちの感覚にアピールする視覚文化の力について考えさせられた。視覚文化が私たちに伝えたいものは多い。その内容と表現、裏にある価値観、制作者側と時代背景等を分析して調べれば調べるほど、見えるものが増えると改めて実感した。

一連の講演録などを基調に、書籍にまとめる作業を現在進めている。

記：マグダレナ・コウオジェイ

連続講演会「視覚文化は何を伝えるか」 (於・東洋英和女学院大学)

前期第1回講演会 (2023年5月31日)

「歴史資料としての台湾の彫刻」

中央研究院歴史語言研究所 鈴木恵可先生

台湾美術史を研究する鈴木氏は、日本の植民地時代における台湾出身者の彫刻について語った。日清戦争後に台湾が日本に割譲された1895年から、日本敗戦となる1945年までの50年間の対象になる。主に二人の彫刻家の作品と生涯が紹介された。

台湾人で最初の近代彫刻家といえる黄土水 (1895～1930)。台湾から初めて帝国美術院展覧会に入選した彫刻「蕃童 (山童吹笛)」、2回目の帝展入選作の大理石像「甘露水」を手掛かりに、黄土水の制作活動を鈴木氏は解説した。遺作は横浜、東京、佐渡島などにもある。

もうひとり、台湾出身の日本人彫刻家、鮫島台器 (1895～1964)。鮫島 (本名・盛清) は若くから台湾北部・基隆に住み、鉄道員として勤務後、黄土水の紹介で東京美術学校教授の北村西望に師事した。今回の講演会には御遺族の鮫島幸夫氏も参加された。

「台湾の痛みのある歴史、日本統治期を語ることが抑えられてきた」。暗い歴史的背景を脱する台湾美術史再構築の意気込みがにじむ報告であった。

記：町田幸彦 (後期第2・3回講演会も)



前期第2回講演会 (2023年6月28日)

「絵葉書から見た女性画家」

本学国際社会学部 マグダレナ・コウオジェイ先生

美術展覧会絵葉書を通して、どのように女性画家を発掘できるか

歴史学では史料が重要であり、史料がないということは、存在していない (いなかった) に等しい。それでは女性は存在していなかったのか。答えは否である。コウオジェイ氏は非文字資料である絵葉書を用いて、1908年～1954年の日本における女性画家に照射する。個人的に蒐集した105枚の絵葉書 (女性画家の作品) をもとに分析を試みたのが本発表 (講演会) である。

日本に限らず、歴史上、女性の芸術家は少ない。数が少ないだけでなく、その史料 (文字資料) が残っていないことも多く、美術史の中で語られる機会も少ない。そこで、絵葉書に注目する。絵葉書とは人気があった作家・作品であったことの証左でもある。

同氏が対象とした105枚の絵葉書の中では、日本画家が35人、洋画家が22人。なぜ洋画の方が少ないかというと、保護者が娘に油絵を習うことを認めない風潮があったためだという。それに対して日本画は、生け花や茶道、お琴のように、上流階級の子女が趣味として楽しめるというイメージがあったようである。当日はこのような分析、考察の一端を披露してくれた。

記：町田小織



前期第3回講演会（2023年7月26日）

「描かれた戦争」

千葉工業大学 河田明久先生

「戦争を描く」ということは、どのような意味を持っていたか

本講演会でいう「戦争」とは俗にいう太平洋戦争を指すが、真珠湾攻撃を境に日中戦争期と太平洋戦争期の2つの時期に分けられる。この2つは全く異なる時空である。

前者は何のための戦争かわからないまま総力戦に突入してしまい、戦争の理念がない。日中戦争が始まると自ら志願して従軍する画家が相次ぐ。新聞や雑誌社から派遣された報道班として前線に赴くが、画家たち自身も報道の任務を担えるとは思っていない。なぜなら既に映画もラジオもある時代なのだから。

後者は戦争の物語が成立し、理念が登場する時期。アジアを植民地化してきた西欧列強が諸悪の根源なのではないか。アジア人によるアジアの回復を目指す自分たちと、それを阻む西欧帝国主義という構図で、善悪二元論が登場する。

戦争理念が登場すると、同じ画家でも描く絵が変わってくる。宮本三郎は「自分は歴史画を書いているんだという意識があった、こんなやりがいがあることがあろうか」と述べている。ついに日本にも本格的な歴史画としての戦争画が現れた。

記：町田小織



連続講演会 続「視覚文化は何を伝えるか」

後期第1回講演会（2023年10月11日）

「歴史資料としての“満州”地図」

九州大学人文科学研究院 ヤン ユー先生

私たちは、地図（map）を水や緑、道や住宅のある場所が示されている客観的な存在と思いがちである。だが、地図の役割や見せ方は、誰が作るのか、誰が見るのか、何をみせるのかによって大きく変わってくる。誰が支配する土地であるとか、どのような身分の人が住んでいる場所であるかも描き出すため、時代の変遷を追って地図を見ると、権力や制度の変遷も見て取ることができるのである。地図は権力（power）の空間的表現と言える。

講演会では、ロシア・日本・中国に翻弄される満州地域の地図がいくつか紹介された。そこには、都市計画に携わった権力者たちの考えが入れ替わりながら展開されていった跡が分かるものだけでなく、それ以前やその隙間で生きていた人たちの存在が記されているものもある。作り手に無視されたり、あるいは隠されたりするものは描かれない。

地図は客観的な存在ではなく、作り手の視点が反映されるメディア。普段見ている地図を別の地図と重ねてみると、たくさんの視点が重なって新しい物語が見えてくるのかもしれない。

記：小寺敦之



後期第2回講演会（2023年11月15日）

「風刺漫画と“新しい女”」

二松学舎大学文学部 足立 元先生

日本の女性史上、1911年（明治44年）は重要である。同年、平塚らいてう主宰の女性誌「青鞥」が創刊された。大逆事件で女性が処刑された直後の発刊だ。また、イブセン作「人形の家」が日本で初上演された。主人公ノラが女性の自立を胸に家を出る社会劇。「新しい女」が流行語になった。

「青鞥」の表紙を描いた女性画家、尾竹紅吉は一文に記した。「新しい女の最尊重するものは絶えない瞬間の向上である」。「社会の中で女性芸術家であることの根幹を言葉で表現した」と足立氏は指摘する。

一方、1891年に登場した近代的漫画1コマ漫画には、「新しい女」を戯画化のネタとして消費する風潮があった。平塚らが売春の実態を知るため吉原（遊郭）を訪れる漫画では、彼女たちに口ひげがある顔を描いた。その傍らには「日本のノラ」と書き添え、茶化した。

「漫画ジャーナリズムには大きな限界があり、現実のことを伝えきれなかった」。



後期第3回講演会（2023年12月13日）

「作兵衛さんと日本を掘る」

映像ジャーナリスト 熊谷 博子氏

そもそも元炭鉱夫の山本作兵衛さんの絵はなぜ、世界記憶遺産になったか。ユネスコ世界遺産に筑豊炭田は登録されなかった。その提出資料の中に作兵衛さんの絵があった。オーストラリア人の世界遺産コンサルタントが見て、「素晴らしい」と言い出したのがきっかけだった。

記録映画「作兵衛さんと日本を掘る」を撮るのには7年間かかった。「私の中で、炭鉱で労働するという皮膚感覚がまるでなかった。筑豊を流れる遠賀川の川べりに弁当をもって座り込み、石炭を積んだ船の往來を想像しながら一日を過ごすこともあった」と回想する。

相手が話すのを待つ。だから時間がかかる。沈黙の時間が長くなることもある。「共感して、待つという姿勢が大事」と強調した。撮りたい人にラブレターを書く、中身のある裸の自分になる、知識をたっぷり蓄える。熊谷氏のドキュメンタリー制作の3原則だ。（山本作兵衛の炭鉱記録画と日記697点は2011年、ユネスコの世界記憶遺産に登録された）。



編集後記

「ああ、やっぱりそういう発想になるのか」と最近思ったこと。IT大手ドワンゴ顧問、川上量生氏が2025年4月の開学を目指すオンライン大学「ZEN大学」について、AI翻訳進化を受けて「外国語科目をなくそうとしている」と語った（2023年12月8日、日本記者クラブ会見）。明快？の耐えられない軽さ！が怖い。（町田幸彦）

発行：東洋英和女学院大学 メディア・コミュニケーション研究所 神奈川県横浜市緑区三保町32

TEL 045(922)7315

FAX 045(922)7315

E-MAIL media@toyoeiwa.ac.jp